

最高にロマンチックな、吉野ヶ里で見つかった日本最古の漢字

日本で出土した最古の漢字は、最高にロマンチック！

日本で漢字が使われ出したのは、約一五〇〇年前だといわれていますが、日本列島出土の最古の漢字遺物は、代表的な弥生遺跡である吉野ヶ里遺跡（佐賀県）の墳墓から二〇〇四年に見つかった中国製銅鏡に刻まれた文字だそうです。

久不相見、長毋相忘

読みは、

久しく相見ざるも、長く相忘るること^な母からん

—長い間会えなくても、いつまでも忘れないで。

何か気持ちを揺さぶるものがありますか。

この甕棺墓には、奄美大島以南で採れる巻貝の貝製腕輪を両腕に多数つけた人骨が納められていました。南海産貝殻腕輪の片腕の装着数としては最も多く、腕輪周辺からは衣服の一部らしき絹布の細片も出土しています（文化庁編 『発掘された日本列島2005』）。

弥生の貴人の一人だったのかもしれませんが。

銅鏡は直径七・四センチ。中国の前漢時代（紀元前二〇二年—紀元後八年）に作られた良好な連弧文鏡だそうです。背面には部分的に朱が付着しているとのこと。甕棺墓の口縁部と石製の蓋の間の粘土目張りからの中から出土したといわれています。

約二〇〇〇年前のものですが、吉野ヶ里の弥生人がこれを読めたのかどうかは不明です。

しかし、あたかも葬られた人に呼びかけたような内容のものが、その墓の蓋の目張りの部分に入れられていたということは、意味を解していたのではないかと、という推測も成り立つのではないかと感じます。

いずれにしても、日本で発見された最古の—それも二〇〇〇年も前の—漢字が、こんなにもロマンチックな意味だったとは、素晴らしい話ではないでしょうか。

中国と交流し巨大古墳を造営したヤマト人が漢字文化を吸収しなかった不思議

ただ、その後、福岡県の志賀島から出土した「漢委奴国王」という金印、日本各地の弥生遺跡から出土する「貨泉」という中国の「新」（後漢との間の短期間存在した王朝）の貨幣など、紀元一世紀に伝来した漢字遺物や、三～四世紀の出土品のわずかな線刻の字はあるものの、漢字文化の本格的な取り入れは、五～六世紀まで待たなければなりませんでした。

その間、卑弥呼の邪馬台国をはじめとして、三世紀半ばの段階までに中国に使節を出し、中国側とコミュニケーションをしていた国々は多数あったと中国側の資料からもわかりますし、五世紀の倭の五王のひとり「武」は、中国の南朝に堂々たる純正漢文の上奏文を渡していますから、その頃までに、高度な漢文を書ける人間が存在していたと思われまます。

しかし、不思議なことに、三世紀半ばから本格的に造営が始まった世界的にみても巨大な前方後円墳などの古墳では、墓の中からは被葬者の墓誌は一切みつかっていません。中国でも古代エジプトでも、墓誌や墓碑銘は必ず書き記されていました。

中国と交流をし、巨大な古墳造営という大土木工事を行うだけの能力を持っていた古代人がなぜ、漢字文化を吸収しようとしなかったのか、という点は、考えてみれば疑問ではあります。

この点について、漢文の歴史に詳しい加藤徹氏は、次のような興味深い分析をしています。少々長いですが、引用させていただきます。

「これは、文字を学ぶ能力がなかった、というより、意図的に文字を学ばなかった可能性がある。

筆者が思うに、古代ヤマト民族の「言霊思想」が、文字文化の輸入を阻んだのではないか。そもそも、和語では、「言」と「事」を区別せず、ともにコトと言った。すべての言葉には霊力があり、ある言葉を口にすると、実際にそういう事件が起きる、と古代人は信じた。例えば「死ぬ」という言葉を口にすると本当に「死」という事実が起きるし、自分の本名を他人に知られると霊的に支配されてしまう、と恐れられていた。

このような迷信を、言霊思想という。

八世紀の『万葉集』の歌人たちは、和歌のなかで、日本を「言霊の幸はう国」「事霊(言霊に同じ)のたすくる国」「言挙げせぬ国」と詠んだ。こうした自覚は、弥生時代のヤマト民族にもあったであろう。

そんな言霊思想をもつ古代ヤマト民族にとって、異国から伝来した文字は、まるで、言霊を封じ込める魔法のように見えたにちがいない。幕末に西洋から写真技術が入ってきたときも、「写真に撮られると魂を抜かれる」という迷信を信じた日本人は、多かった。何千里も遠く離れた人や、数百年も前に死んだ人

のメッセージも正確に伝える文字というものに対して、古代ヤマト民族が警戒心を懐いたとしても、不思議はない。

古代のヤマト民族の社会は、文字がなくてもやってゆけたろう。先祖の事件や物語は、記憶のプロである語り部が暗誦すれば事足りた。稲束の量を記録する場合は、縄の結び目を使う「結縄」で間にあった。中国や朝鮮半島との往来には、漢字が必要となったかもしれないが、それは少数のスペシャリストの仕事であり、民衆の日常生活とは関係がなかったはずである。

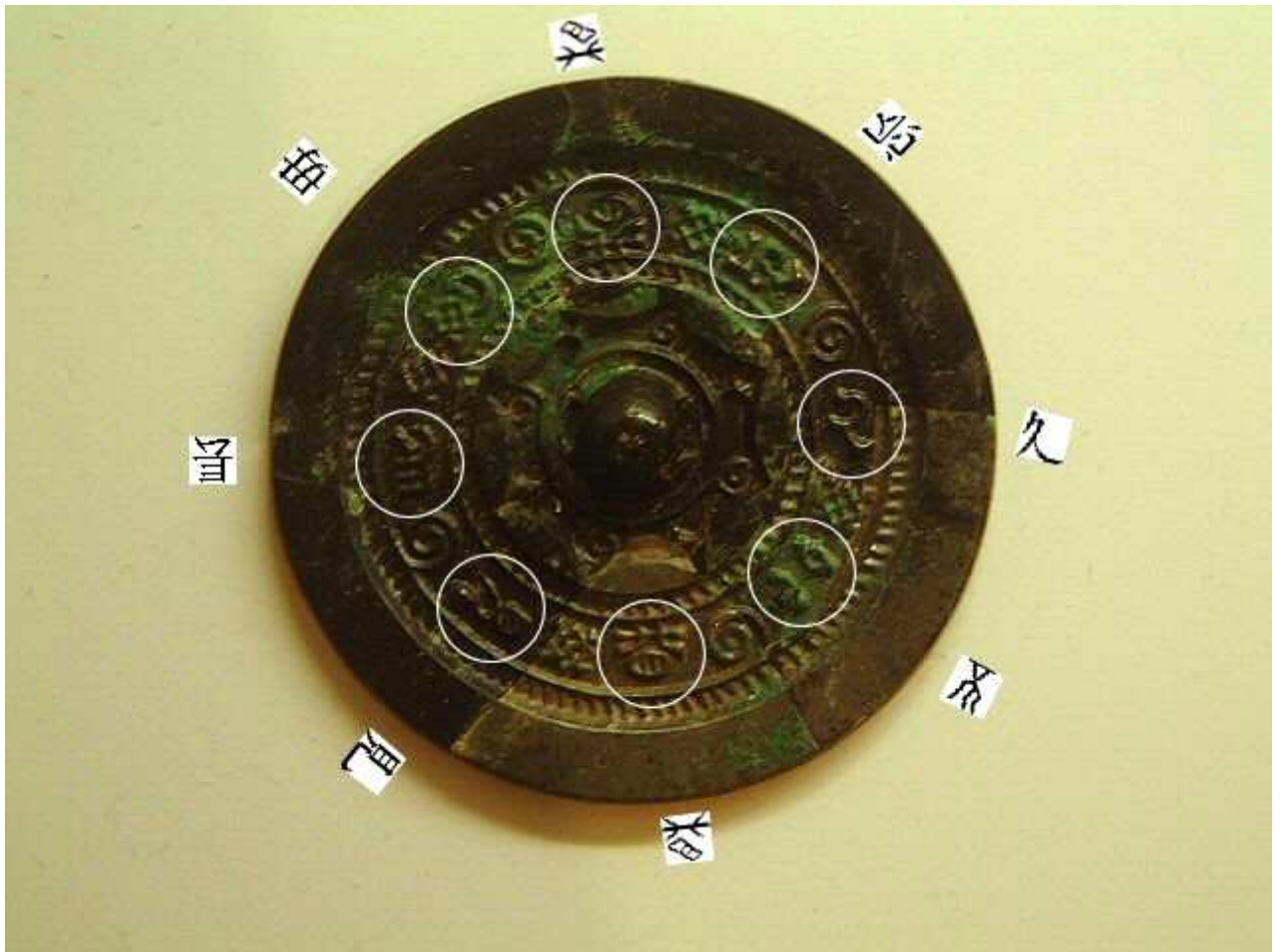
文字記録に対する抑制、という現象は、どの民族にもあった。

例えば、古代インドでも、崇高な教えは文字として記録してはいけない、という社会的習慣があった。釈迦の教えも、弟子たちはこれを文字に記録せず、口から口へと伝えた。釈迦の教えを文字にした成文経典ができあがるのは、釈迦の入滅後、数百年もたってからのことである。現存する仏教の経典の多くが、梵語で「エーヴァム・マヤー・シュルタム」（このように私は聞いた。漢訳仏典では「如是我聞」）という言葉で始まるのは、こういうわけである。

西洋でも、崇高なものは文字に写してはいけない、という発想があった。例えば、『旧約聖書』の神の名前も、その正確な発音を文字に写すことを禁じられたため、YHWH という「聖四文字」（ラテン語でテトラグラマトン）の子音しか伝わらず、どう母音をつけて読むか、不明になってしまった。十三世紀以降、キリスト教では、「エホバ」と読む習慣ができたが、現在ではヤハウエと読む学説が有力である。

八百万の神を信仰していた古代ヤマト民族にとっては、森羅万象が、宗教的な意味をもっていた。こうした世界観が、漢字漢文の日本への定着を阻む要因となっていた可能性がある。」（『漢文の素養』）

吉野ヶ里で発見された二〇〇〇年前の鏡―「久不相見、長毋相忘」とある。



(出所) 『古代史癩祭』(<http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/index.htm>) より。同HPの管理人が自ら展示会で撮影した貴重なもの。

政治外交の必要性から、漢字文化を急速に消化吸収

―稲荷山古墳の鉄剣と倭王の上奏文

こうして、漢字文化は、紀元後五〇〇年近くは、日本では根付きませんでした。中国の史書『隋書』の東夷伝・倭国の部分で、日本について、次のように説明されています。

文字無し。唯だ木を刻み繩を結ぶのみ。仏法を敬す。百濟より仏經を求得し、始めて文字有り。

日本で、漢字文化が本格的に吸収され始めるのは、仏教伝来以降ということになります。

さて、出土品の漢文で最古のものが、吉野ヶ里遺跡の銅鏡の銘文であれば、

伝世品で最古のものは、石上神宮で明治六年に発見された「七支刀」（「七枝刀」とも書く。）の銘文です。日本書紀に、百済から献上された旨の記事があり、その後行方不明だったものが、千数百年後に発見されたというわけです。銘文の内容は、三六九年に、百済王が倭王旨に贈ったというものでした。

そして、古代日本人自身が書いた漢文として有名なものは、五世紀半ばの稲荷山古墳出土の鉄剣に刻まれた百十五文字と、倭王の武が中国の宋に送った上奏文です。いずれも四七〇年代のもので、前者は、「ワカタケル大王（雄略天皇との説が強いが、異説もあり不明）の天下統一を助けたわが一族の功績を記念するために、この名刀を作らせた。」というのですが、和風の漢文だといわれます。後者は、「多数の国を平定して国内統一を推し進め、あまねく中華の徳が及ぶようにし、中国への朝貢を欠かしませんでした。」というへりくだった内容ながら、美文調の純正漢文です。

日本で、漢字普及の要因となったのは、これらから想像できるように、軍事的・外交的思惑によるものでした。倭の五王の中国側記録からみられるように、いかに自国の地位を中国に認めさせるか、朝鮮の諸国（高句麗や百済など）との関係でいかに優位を保つかといった外交的駆け引きのためには、漢字は必須だったのです。『宋書』倭国伝では、倭王が宋に朝献し、自ら「使持節都督・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事安東太將軍倭国王」と称し、正式の任命を求めたとあります。中国側は、「安東將軍倭国王」だけにとどめたり、それに近い称号を授けたり、「鎮東大將軍」「征東將軍」などのより高い称号を与えたり、とその時々々の東アジア情勢に応じて、対応を変えています。これが、五世紀のことでした。

六世紀以降に爆発的なエネルギーで漢字文明を導入

以後、六世紀に入り、漢学学習熱が高まり、友好関係にあった百済から、五経博士を招聘し、医学、易学、暦学などの漢学が導入されていきます。そして、仏教伝来に伴い、仏典や僧侶が多数もたらされ、聖徳太子によるといわれる「十七条憲法」の制定、「三経義疏」の著述、隋への国書の提出などへと続き、漢字は政治や仏教浸透のためにも必須となっていました。なにより、仏教導入ということは、仏典だけでなく、工芸技術、美術、寺院の建築技術、測量技術、宗教儀礼に伴う歌舞音曲、暦やまじない、施療など、総合的な文明体系の導入でもありました。本格的な漢字伝来からわずか二百年程度の短い間に、貪欲に消化吸收していく爆発的なエネルギーは、あたかも江戸～明治にかけての日本のそれをみるようです。

文字文化は、八世紀初めの古事記、日本書紀、万葉集へと発展していきますが、決して誤解していけないのは、「日本が文字を使わなかった。」というこ

とは、「日本には言葉や文化がなかった。」ということでは全くない、ということとです。漢字によって、もともとあった言葉や文化を現す手段が用意されたということなのです。この点は、後ほど述べたいと思います。

無文字社会からわずか一〇〇～二〇〇年で漢字文化の高みに到達

漢字による日本最古の書物が、聖徳太子が著した仏教の経典の注釈書である『三経義疏』であるといわれています。そのうちの最初のものが『法華義疏』ですが、六一五年の成立と伝えられています。となると、仏教伝来の五百三十八年からわずか数十年で、このような大事業を成し遂げた聖徳太子の偉大さを感じます。それまで、倭の五王のような中国への堂々たる口上書を作るまでの水準にあったにしても、聖徳太子がこれだけの注釈書を五年足らずのうちに仕上げるというのはすごいことでしょう。

ただし、最近、聖徳太子については、その実在を含め、活発な議論がなされていますし、この『三経義疏』についても、中国の注釈書と同文のものが多く含まれているとか、後世の作になるものだ、といった指摘もあります。それらの議論は興味深いものですが、もし聖徳太子の業績が他の者によっても、ずっと無文字でやってきた日本が、わずか一〇〇～二〇〇年の間に、中国との外交や仏教伝来をきっかけとして、驚異的な勢いで、漢字文化、仏教文化を吸収し、立派な書物が著されるまでになったその吸収エネルギーは、驚異的というほかありません。